

## 第9回日本時間生物学会・名古屋の報告

大会会長 太田 龍朗

名古屋大学大学院医学系研究科精神医学分野

日本時間生物学会の第9回学術大会が、2002（平成14）年11月14日（木）、15日（金）の2日間、名古屋市中小企業振興会館（吹上ホール）で開催された。たまたま、日本臨床神経生理学会が同時期に開かれたことで、臨床の一部の会員が出席できなかったが、それでも230余名の参加を得て盛会のうちに幕を閉じることができた。

特別講演にはColumbia大学教授で、SRBRの会長でもあるRae Silver先生においでいただき、SCN内の時間遺伝子と蛋白の発現に関する先生のグループの研究成果を基にして、現在迄に明らかになったSCNの機構についてお話いただいた。SCN内の時計遺伝子の発現は前進と後退では異なることや、光によって誘導されるが律動性を示さないものと、光によらないが律動性を示す発現様式があることなど、きわめて興味深い解説が行われた。また2日間にはミニレクチャーとして、往年の研究者であられる東大理学部の田澤 仁先生から生物時計の発見者エルヴィン・ビュニングの業績を御紹介いただいたが、歴史的にも大変興味深い内容であり、今日の研究にインパクトを与える有意義なお話をうかがうことができた。

シンポジウムは基礎と臨床の2つで、前者は今や時代の最先端の研究を行く5人の演者によって、リズム発振や時計機構の分子生物学的研究が披露され、また後者はこうした成果を踏まえた上で、その臨床応用としてのリズム障害を示す疾患への薬物療法や新しい治療法の開発を指向するストラテジーが、そのような開拓研究に携わる5名の演者によって発表された。いずれも斬新な着想と目覚ましい成果が熱っぽく語られ、盛んな討論を呼び起こしていた。第2日目に行われたワークショップは、主として循環器系や身体疾患での時間治療の最前線を行く気鋭の研究者5人による発表と討論が、夕刻にもかかわらず熱心に行われた。

一般演題は、口頭発表が34題、ポスター発表が45題、計79題が発表された。前者では臨床系11題、基礎系23題、後者では臨床系15題、基礎系30

題と臨床と基礎の比率はほぼ1：2であり、やはり基礎研究の発表が多かったが、各会場とも活発な討論が繰り広げられていた。ランチョンセミナーは各日2題ずつ行われ、旧・新理事長の千葉、高橋両先生の御経験に基づく示唆に富むレクチャーと、大阪大学蛋白研の永井所長と久留米大学精神科の内村助教授による光や薬物の自律系への働きかけや効果について、治療への応用に役立つ講義が行われたが、いずれの会場も満員の盛況ぶりであった。

第1日夕刻に行われた懇親会は、名古屋大学医学部室内合奏団員による演奏を背景に、会長、理事長、招待のSilver教授の挨拶が続き、川村 浩名誉会員の音頭で乾杯が行われ、和やかな交流が行われた。会の最後に次期会長から本年秋に予定されている大会の紹介があった。

最終日の夜に行われた市民公開講座は「健やかなくらしと生体リズム」のテーマで、4人の講演が行われたが、眠りと体のリズムを中心に基礎から臨床まで、各方面の研究や現状が話題となり、わかりやすい懇切丁寧な各演者の話により市民の評判は上々であった。事前に数回の新聞広告があったこともあり、満席の会場は熱心に聞き入る人々でうめられた。

大会全体の運営には、名古屋市から数名のボランティアに参加していただくなど、各方面から多大な御援助と御協力をいただいた。この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。会場の配分や時間の割振りがいろいろな企画に出やすいようになっていたとの評価を後でいただき、主催者としてほっとしているところである。事務局や担当の方々の労を多としたい。次回は2003年9月9日～9月12日まで、北海道大学の本間研一教授を会長に、第1回時間生物学世界大会（WCC）と合同で札幌で開催される予定である。